



ベルナデッタの祈り

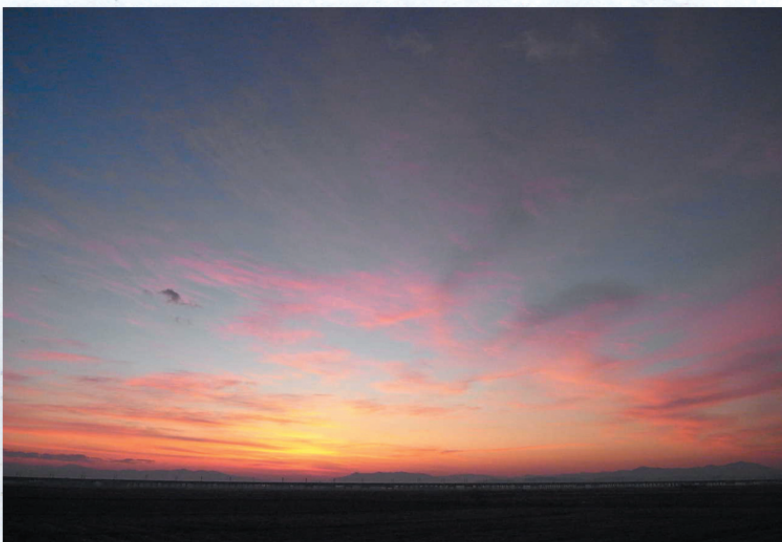
ピレネー山脈が源のガブ川は、ルルドの町の中央を流れ、聖域の少し手前で左に大きく蛇行し、大聖堂横を流れて行く。

ルルドには二泊三日だが、一日目は夜十時に到着。三日目は朝八時半にホテル出発だから、実質は一日である。幸い私は早起きを取りえで、最初の朝も三日目の朝も、まだ暗いうちに妻を起こして聖域の洞くつに向かう。日ごろは私の早起きにへきえきしている妻も感謝したに違いない。

「早起きする男と結婚した女は幸いである」と聖書には書いてないが、早朝の静寂の中に神の息吹きを体感して一日のスタートを切れる恵みは大きい。洞くつ前のベンチに座り、ベルナデッタについて思いを巡らす。私の祈りと彼女の祈りの違いは何だろう。貧しく、無学な十四歳の少女に聖母マリアは神のメッセージを告げる使命を与える。それをベルナデッタは無条件に「ハイ」と受け入れた。ウソつき、狂人、警察署長をはじめたくさん大人の尋問、中傷ひぼうにも謙虚に耐え、使命を全うする。

ベルナデッタの祈りは自分の願望のようなものではなく、第三回で紹介したカルメリットと同じように、神への賛美と感謝であった。一方、私の祈りの多くは願望の方が多い。そんなことを考えているうちに周囲は明るくなっていた。ホテルに帰ろうと振り返ると、遙か前方に美しい朝焼けが見えた。これだけは人の多いシーズンには見られない、自然だけの神秘的な朝焼けであった。写真の一枚は、山口教会の谷口政子さんが、その朝焼けを撮影したものである。

聖母マリアの出現が十九世紀という比較的近くの出来事なのに、



ルルドの朝焼け

広大な聖域が確保できたのは、ベルナデッタが住んでいたルルドが当時、本当に田舎だったからであろう。ところで、聖母マリアの出現は、ルルドから五十九年後の一九一七年、ポルトガルの田舎町、ファチマでも起きた。

こちらは三人の子供(十歳、九歳、七歳)に聖母マリアが六回出現した。どちらも子供に出現されたのは、純粹にその事実を受け入れるのは子供だと神が判断されたのであろう。ファチマの三人の子供のうち二人は早く死ぬが、十歳のルチアは大人になって修道女になった。ベルナデッタも、もしかして、神にすべたを捧げる修道女になったのはだれにでも理解できることである。しかし、ベルナデッタは健康を害し、自身はルルドの水で癒されることなく三十五

歳の若さで帰天した。そこでも不思議な出来事が起きた。彼女の遺体は腐敗しなかったのである。そして、今もガラスの棺に入れられ、パリトリヨンのほぼ中央にあるヌヴェールの修道院の本部に安置され、それを見ることが出来る。ルルドの病人の治癒といい、人間の常識では考えられないことは確かにあるのだ。さて、第六回で触れたルフトハンザ機の座席表示で「B」がない理由はわかったかと二人の方から尋ねられた。ドイツ人スチュワーデスの「ないから」というのは論外だが、業者が聞いてもわからない。ご存知の方があればご連絡

最後に、そのドイツ人女性の立派なおしりに敷かれる話。「日本人女性でも持てあましているの」と書いているのはだれのことかと妻から質問された。「一般論として」という答えを賢い妻は納得した。「ハイ」と受け入れるのは大切なことなのである。(前山口放送取締役ラジオ局長)



ベルナデッタの遺体は今も腐敗していない(「奇跡の聖地」から)